

# 猿田彦大神

この石造物は、かつて新河岸川旧流路の傍らで石神塚と呼ばれた場所にあつたもので、笠付型で、明和五年（1768）十二月星野安房守の年号が刻まれています。猿田彦は、天孫降臨の折に道案内を務めたことから、道祖神と同一視されていますが、これも、庚申塔と同じく村の辻や境界に置かれることが多いので、両者が次第に結びついていった側面もあると考えられています。

# 三猿塔

庚申信仰こうしんしんこうにおける記念や供養塔として建てられたのが庚申塔です。なかでも、庚申の申さる↓（猿）との関連で、庚申信仰には三匹の猿が登場します。三戸さんしによる天帝てんていへの報告を阻止する意味で、「見ざる・聞かざる・言わざる」で知られる三猿が庚申信仰に取り入れられました。この三猿が庚申塔に刻まれているため、庚申塔は三猿塔とも呼ばれています。

境内地の三猿塔は板碑型で、延宝四年（1676）十月の年号が刻まれています。

# 力石

力石は江戸時代から若者組に入る資格があるかを試験する際に担がさせた石で、かつて下福岡にも、若者組わかぢいしゅうがあり、十七歳の秋祭りの時、この組に入れてもらう習慣がありました。境内の力石は江戸後期から明治初期に下福岡の船頭原田七蔵・吉野源二良・原田清吉らにより奉納されたものです。それぞれの重さ四拾貫余（150kg）、参拾六貫（135kg）と奉納者が刻まれています。